

想作天文学 [II]

ディスカバリー号の発見

パイオニア、ボイジャー、ワンドラー、ディスカバリー号と続いた木星系の探査の最後の航海で小惑星帯をよぎって地球への帰還の途にあったディスカバリー号は、驚ろくべき天体を発見した。

これは「天体」と呼ぶべきだろうか？というのは、この天体はまんまるで、しかも透明だったからである。漠然とディスカバリー号のブリッジで宇宙をながめていた第一発見者の乗組員ははじめ、無数の光り輝やく泡をふくんだビー玉のような天体を見つけてびっくりしたという。近づいてみるとそこに輝やく光の泡の数々と見えたものは、むこう側の星野が逆転してみえていたのであった。なんと、これは「ルネベルグレンズ」そのものだったのである！

ルネベルグレンズそのものの発想はすでに古い。屈折率が中心からの距離のみの関数であるような球対称の媒質で、その関数をうまく決めると、任意の方向からの平行光線が同心球殻上に焦点を結ぶことができる。これがルネベルグレンズである。ふつうのレンズも鏡も特定の方向に対してしか焦点が存在しない。これに対してルネベルグレンズはまさに「全天志向型」であり、「完全レンズ」と呼んでもいいくらいだ。

この天体が深い宇宙に浮かんでそれ自体のまわりに宇宙を映しだしている光景の美しくさはたとえようがない。むしろ、それ自体が宇宙になっていると言ったほうがいいだろう。また、まわりの星のスペクトルは放射状の一本のカラーの線状としても見えるのだ。材質はガラスのような熔融固体のように考えられる。しかし、あまりのみごときに、一部を割って資料解析用のサンプルとするのはためらいを感じてしまう。

いったい誰がこのようなものをつくったのだろうか？

高度の工学とロマンをもつ高等文明がつくったものなのだろうか？

ディスカバリー号より続報が入った。

「さきに報告した天体の創造者について重大な事実が判明した。この天体は人工ではなく自然に発生したものである。これはケイ素を主体としてできている生命体それ自身である。宇宙に見とれて、それ自身を美しく映しだそうと熱望した個体が合目的性により、このように美しい構成となったものである。

私達にはここにはじめて地球外の知的生命体を、しかもこのような形で発見したのだ。この美しい結晶のような、生命とも天体ともマイクロコスモスともつかぬものをギリシャ神話に因んで、「ナルシスター」と命名した。委細続報。」 (HIRAX)

◇ 2月の天文暦 ◇

日	時	記	事
1	13	水星	内合
1	14	土星	留
1	23	上弦	
4	13	立春	(太陽黄経 315°)
5	1	冥王星	留
5	23	月	最近
8	17	望	
10	23	金星	留
13	7	水星	留
16	5	下弦	
17	17	月	最遠
19	9	雨水	(太陽黄経 330°)
21	14	火星	留
24	6	朔	
24	23	木星	留
25	10	金星	最大光度
26	20	水星	西方最大離角

◇ 2月の日月惑星運行図 ◇

